者問餌食何宜、亦擧二品而答、

〔塵塚談下〕斷食して服藥の事、釋迦如來の病を療る方也、七ヶ日斷食にて藥を飲み、七ヶ日後は生死によらず藥を用ひずと、佛經に說給ふとかや、今世も律僧の正しき人は、長病なれば、七ヶ日服藥し、八日目一日休藥して又服藥す、七日々々に一日づゝ休み藥用するよしを聞り、此斷食して服藥の方、藥治より萬病に最上の藥也、痢病、食傷、蟲症、泄瀉、腹痛、積聚、嘔吐の類の病には、別して驗し多し、既に大七氣湯などは、絕食にして用ゆべしと古人も云り、予ゑば〳〵效驗を得たる事なり、疑ふべからず、然るを俗人は喰さへすれば、全快なるものと心得て、不食の病人に强てすゝむ、わけて婦人は無理無體に飯せしむ、これを介抱と思ふ、甚しきひが事ぞかし、又世俗は水を望む病人に、水をあたへざるが多し、これも食をすゝむるにひとし、食をすゝめ却てこれが爲に命を失ふもの少なからじ、卑賤の者には水ばかり飲みて、醫藥におよばず全快するもの多くあり、醫法の祖たる張仲景曰く、水を望む病にはあたふべしと、又却温經に曰く、水をのぞむ病に水を飲すべしと說玉ふ、また新汲水は天然の白虎湯なり、藥にあつべしと本草に見へたり、是等の語を見て忌むべからざる事をさとし、少しもいとはず飲すべし、釋尊仲景の敎ある事を知らず、歎しき事也、是にかぎらず俗人の私智のならはしには實要をうしなひ、忌べき事を返て養生になると思ふの間違のみありて、害となる事多し、歎くに餘れり、

〔牛渚漫錄四〕減飲絕粒。

荻野台州著減飲論、和田東郭治辭囊、極節飲食、太田無聲曰、凡療膈曀反胃、量其人强弱虛實、當以絕粒爲先、各有所見、〔略〕中按、素問怒狂病、有岐伯奪其食之言、然則聖人亦有此法乎、

〔皇國名醫傳後編上〕古林見宜

古林正温、通稱見宜、號桂庵、又壽仙房、播磨飾磨人、赤松氏則之裔、〔略〕中正温與福岡太侯如水有舊、侯延而爲客、

灌水